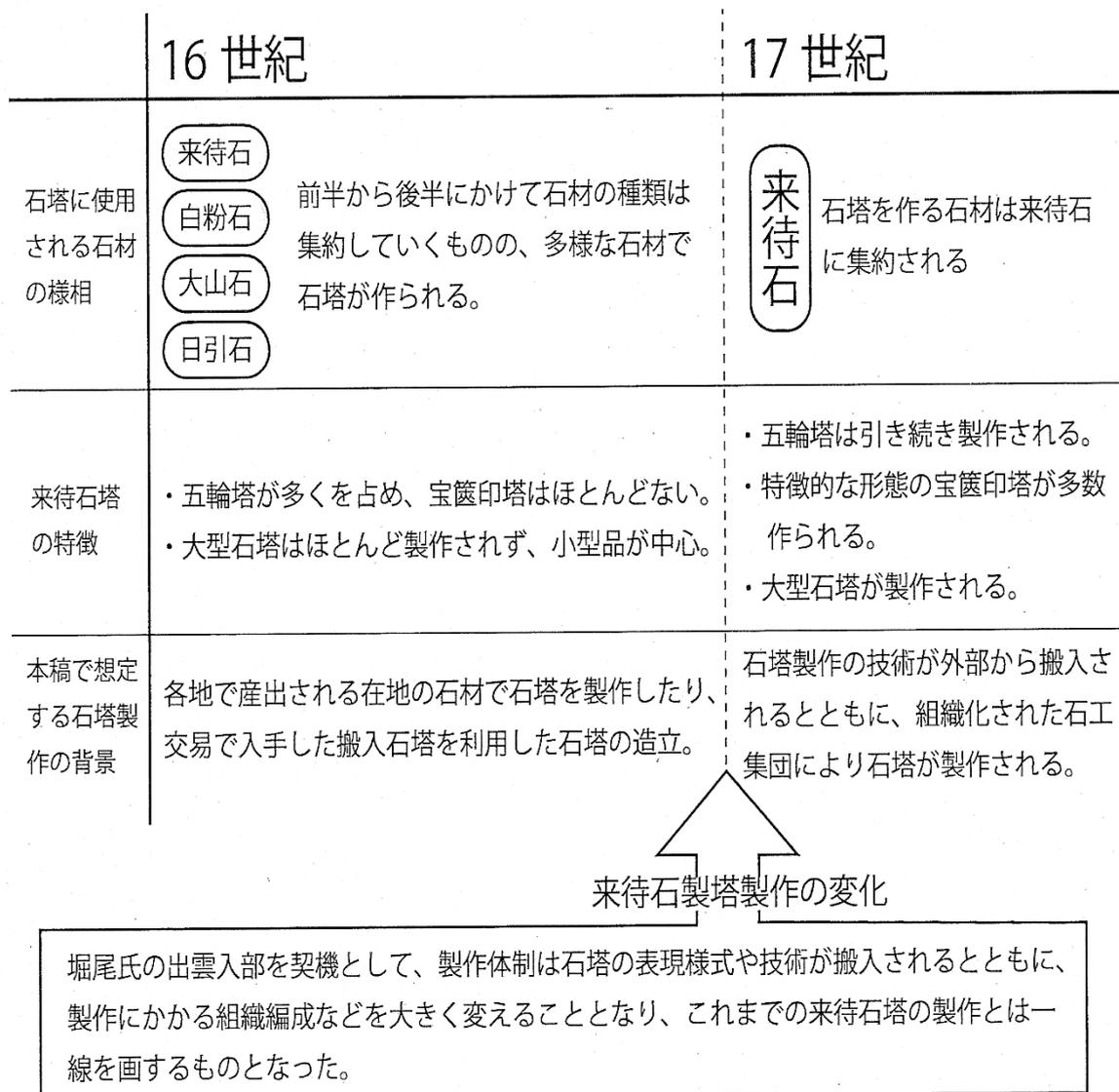


察していく必要があるだろう。さらに、出雲地域では一石五輪塔はほとんど作られず、五輪塔は組合せ式である。また、浜松の石塔は各部位とも出雲地域のものとは比べてひと回り小さく、総高もひと回り低い。

来待石（凝灰質砂岩）はその岩石としての特性から、細かい細工や加工が可能で、多様な形態と大きさに対応でき、また、埋蔵量も豊富であることから量産化の需要にも対応できる優れた石材である。風化が激しいとされる来待石ではあるが、山野に露出している玉石や良質な部分を利用すれば風化の速度も遅く、長期にわたって原型を保っている。近世大名墓としての石塔の大型化にも宝篋印塔のような細かい細工にも耐えうる石材であり、堀尾氏は、来待石を一族の墓石や供養塔に用いる格式のある石材として扱っていたのだろう。

来待石製の石塔がある時期から急に量産され、その宝篋印塔も出現当初から特徴的な形態を有することを考えたとき、先に提示したような堀尾氏の出雲国入部との関係を考慮するとスムーズに説明ができる場所である。今回の調査により、その仮説の証明自体はできなかったが、可能性について指摘できるとともに、課題も出てきたところである。来待石製石塔の16世紀段階での生産と17世紀を



第6図 来待石塔製作の変化概略モデル

前後する段階ではその形態・様式は異なり、突如として完成された（特殊な形態をした）来待石製宝篋印塔・五輪塔が出現する。その契機として近世大名堀尾氏の入部を想定したところであるが、こうした歴史的事象と物質文化の変容について、どのようにリンクしてくるのか、さらなる調査をしながら、他の分野からの多方面のアプローチによって、17世紀前後に確立された来待石製宝篋印塔成立の系譜について更に検討する必要があるだろう。

- 註1 出雲考古学研究会 1987「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える 6』出雲考古学研究会、西尾克己ほか 1993『宍道町歴史史料集（古墳時代編Ⅰ）』宍道町教育委員会、2007 島根県教育委員会『山代郷北新造院跡 史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（来美庵寺）発掘調査報告書』など
- 註2 狭川真一 2015「松江の中世石塔訪問記」『松江市歴史叢書』8 松江市
- 註3 間野大丞 2000「宍道町岩屋寺所在の紀年銘のある宝篋印塔について」『来待ストーン研究3』来待ストーンミュージアム
- 註4 岩屋寺薬師堂裏は来待石の岩盤を掘りぬき、仏像を安置したような掘り込みが残り、堂宇をその前面に建てた造りとなっている。「慶長12年銘」板碑は来待石石窟を掘り込んで埋め込まれており、銘文は「江州浅井郡山田口主 久口 南無阿弥陀仏 慶長拾貳年二月日」と確認できる。どのような経緯でこの板碑が製作されたかは分からないが、江州浅井郡に出自をもつ人物が出雲国に移住し、岩屋寺薬師堂と来待石製石造物群製作に関わったことを彷彿させる。江州浅井郡は天正13年（1585）から18年（1590）まで、堀尾氏の所領に含まれていた。時代的な背景を考えれば、堀尾氏の出雲国入部との繋がりを想定できる。
- 註5 西尾克己・稲田信・樋口英行 2005「玉湯・報恩寺の石塔群」／「玉湯・上福庭家墓所の石塔」／「宍道・川島家墓所にみる石塔の変遷～石龕から竿状石塔へ～」、樋口英行 2005「来待石製石龕の成立と展開～江戸時代前半を中心に～」『来待ストーン研究 6』来待ストーンミュージアム、松江石造物研究会 2006「松江石造物研究会来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景～松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術～」『来待ストーン研究 7』来待ストーンミュージアム、岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・樋口英行 2007「春光院に所在する来待石製石塔について」『松江市歴史叢書1』松江市教育委員会、松江石造物研究会 2008「来待石製大型石塔調査（補遺）～松江・洞光寺宝篋印塔、牧志摩宝篋印塔～」『来待ストーン研究 9』来待ストーンミュージアム、岩屋寺石造物調査団 2008「岩屋寺石造物調査報告」『来待ストーン研究 9』来待ストーンミュージアム
- 註6 日引石製、白粉石製、来待石製の石塔が同一の場所で確認される例はいくつか知られている。そのうち総合的に調査されたものとして岩屋寺石造物群（岩屋寺石造物調査団 2008「岩屋寺石造物調査報告」『来待ストーン研究 9』来待ストーンミュージアム）、米坂遺跡（島根県教育委員会 2011「山辺遺跡・鞍切遺跡・米坂古墳群・貝先遺跡他・国道485号道路（松江第五大橋道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」）、佛谷寺石造物群（岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・佐伯純也・木下 誠 2014「龍海山三明院佛谷寺に所在する石造物群について」『伯耆文化研究』伯耆文化研究会）、石原聡・宍道年弘・野坂俊之・三原一将 2015『出雲鱒淵寺埋蔵文化財報告書』出雲市の文化財報告 28 出雲市教育委員会などがある。
- 註7 今岡利江 2001「山陰の中世石造物についての一考察～日引石製品を中心に～」『島根考古学会第18集』

- 島根考古学会、佐藤利江 2015「山陰の石塔における鰐淵寺資料の位置づけ」『出雲鰐淵寺埋蔵文化財報告書』出雲市の文化財報告 28 出雲市教育委員会
- 註 8 樋口英行 2004「白粉石・来待石の宝篋印塔・五輪塔」『宍道町ふるさと文庫 19』宍道町菟古館、佐藤利江 2015「山陰の石塔における鰐淵寺資料の位置づけ」『出雲鰐淵寺埋蔵文化財報告書』出雲市の文化財報告 28 出雲市教育委員会
- 註 9 松江石造物研究会 2006「松江石造物研究会来待石製大型石塔の出現とその歴史的背景－松江藩主堀尾氏のもたらした石造技術－『来待ストーン研究 7』来待ストーンミュージアム
- 註 10 樋口英行 2005「来待石製石龕の成立と展開～江戸時代前半を中心に～」『来待ストーン研究 6』来待ストーンミュージアム、今岡利江 2006「石室を持つ宝篋印塔 3 例」『島根考古学会誌 23』島根考古学会
- 註 11 西尾克己・稲田信・樋口英行 2005「玉湯・報恩寺の石塔群」『来待ストーン研究 6』来待ストーンミュージアム
- 註 12 註 9 に同じ
- 註 13 註 10 に同じ
- 註 14 註 10 に同じ
- 註 15 岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・樋口英行 2007「春光院に所在する来待石製石塔について」『松江市歴史叢書 1』松江市教育委員会
- 註 16 岡崎雄二郎・樋口英行 2002「松江市・安國寺所在の石塔について」『来待ストーン研究 4』来待ストーンミュージアム
- 註 17 朽津信明・西尾克己・稲田信 2012「松江藩で利用された花崗岩類」『松江歴史館研究紀要 2』松江歴史館
- 註 18 江戸・養源寺の堀尾家墓所には堀尾忠晴、石川廉勝妻（堀尾忠晴娘）、堀尾式部、松村監物、堀尾采女の石塔があり、いずれも石材は伊豆産の安山岩（小松石）である（西尾克己 稲田信 佐々木倫朗 2011「白華山養源寺 [東京都千駄木] に所在する堀尾忠晴石塔について」『松江歴史館研究紀要 1』松江歴史館）。高野山での堀尾家墓所には堀尾吉晴、忠氏、忠晴、石川廉勝妻（忠晴娘）、松村監物、堀尾頼母助、堀尾民部、堀尾勘解由の石塔があり、石材は砂岩 [和泉砂岩か] または花崗岩である（西尾克己・稲田信・木下誠 2013「高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について－近世大名墓と堀尾家の宗教的背景－」『松江歴史館研究紀要 3』松江歴史館）。
- 註 19 森町考古学研究会 2008「森町の中世石塔」『森町考古』20
- 註 20 松井一明・木村弘之・溝口彰啓・太田好治 2006「浜松市西伝寺における中世石塔－浜松市域の中世石塔調査報告 1－」『浜松市博物館報 1 8 巻』浜松市博物館。ここで紹介した宝篋印塔は、東三河型式宝篋印塔とされ、東三河で産出される砂岩で製作された宝篋印塔で 16 世紀代に製作されたものだと考察している。
- 註 21 松江市寺町の石工渡部家の伝承では、先祖は浜松から堀尾氏とともに来たと伝える。（永井泰 2014「雑記帳」『島根の石造物データ』）

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、足立順司氏には、調査に訪れた私たちに対し多大な御便宜と御協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

(おかざき ゆうじろう 松江石造物研究会代表)

(にしお かつみ 松江市史編集委員会松江城部会長)

(いなた まこと 松江市歴史まちづくり部史料編纂課長)

(きのした まこと 松江歴史館学芸係長)

(ひぐち ひでゆき 松江石造物研究会会員)



写真1 蓮華寺境内所在の石塔 全景



写真2 蓮華寺境内所在の石塔残欠(1)

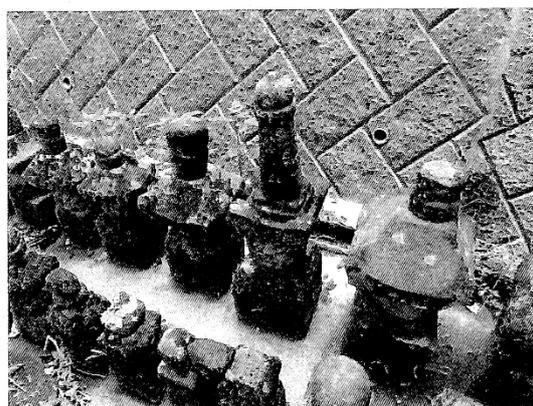


写真3 蓮華寺境内所在の石塔残欠(2)

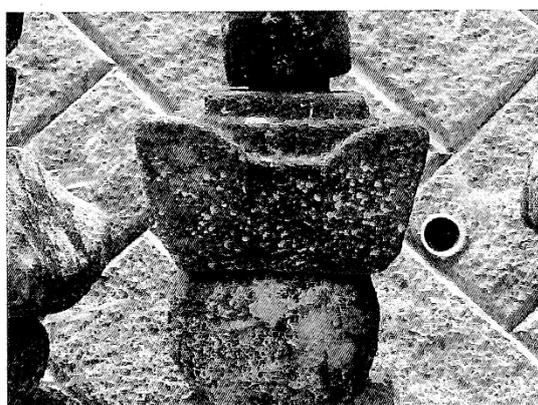


写真4 蓮華寺境内所在の石塔残欠の笠(第3図-6)



写真5 蓮華寺境内所在の石塔残欠の笠(第3図-6)